

I 研究計画

目指す子供の姿

言葉の力を自覚し、自らの言語生活に活かす

国語科における納得解を導く姿を、「言葉の力を自覚し、自らの言語生活に活かす」と設定し、研究に当たる。

1 目指す子供の姿について

「言葉の力」とは、自分の思いや考えを他者に伝える力・思いや考えを捉えたり深めたりする力・自分の思いや考えを新たに生み出す力のことを指す。この三つの力を子供に自覚させることを目指す。

「言語生活に活かす」とは、獲得した学びを、単元を越えたり教科を横断したりして活用できることである。解釈を表出したり、詩や俳句、報告文、感想を書いたり、スピーチをしたりする際は、その目的に応じて情報を選択し、技法を意識した読み方や書き方、話し方・聞き方をしなければならぬ。そこで、自分だけでなく、他者と解釈や表現を比較等させていく過程で言葉に着目させていく。そうすることにより、言葉の力を自覚し、学んだ読み方や書き方、話し方・聞き方を意図的に自らの言語生活に活かす姿につながると考える。

2 これまでの取組について

1年次は、「単元計画の工夫」と「目的や相手を意識した対話」の2点を研究内容として研究を進めた。

成果は、子供が見通しをもって学習に取り組むことができたこと、これまでよりも目的を明確にした対話ができたとある。子供のつまずきから課題を見いださせたことが学びの必要感につながり、それが単元計画にも活かされた。また、対話の観点を教師が明確に示したことで子供の目的意識が高まり焦点化された対話となった。

しかし、以下2点の課題が残った。1点目は、他者を意識した対話にまで到達できなかったこと、2点目は、子供が学びを自覚できるような振り返りになっていなかったことである。

3 研究内容について

2年次は研究内容として以下の2点に取り組む。

(1) 他者を意識した対話

対話的な学びの場面で目指すのは、思いや考えを広げ、深めることである。対話の相手は教室内に限らず、発達段階に応じて、作者・筆者等も想定する。このような対話過程において自分との対話、いわゆる自己内対話も行っていく。それらの対話の中で新たな解釈や表現等の納得解が作られていく。新たな解釈や表現とは、全く異なる解釈や表現のみを指すのではなく、自身の解釈や表現が強化され確信することを含む。そのため、この対話的な学びを実現させるためには、自他の解釈と表現等とをすり合わせていくが必要になる。その際、比較や類推等の手立てを用いて観点を明確にした対話を設定していく。

こうした学習活動を通して、自他の考えをすり合わせ、共感し合える子供の育成につなげていく。

(2) 学びを自覚する振り返り

単元において、また、一単位時間においてもどのような力を身に付けたのか、子供が言葉の力を自覚することにつながるような振り返りの場面を設ける。身に付いた力を言語化・視覚化して振り返ることで、自己の変容に気付いたり自らの言語生活に活かしたりする。子供自身の学びの自覚を育むことができる。

4 検証方法について

(1) 授業を記録したプロトコル及び映像を基に分析を行う。

(2) 分析結果に基づいた改善授業を必要に応じて行うことで分析の妥当性を検討する。

(田澤 真也子)

Ⅱ 研究実践及び考察

【実践例① 授業者：高瀬 美千代 対象：4 学年 3 組】

本時で目指す授業

場面の移り変わりや登場人物の人柄が表れている言葉に着目させながら、話の展開の面白さや、人物の面白さを読ませる。友達の音読を聞き合うことにより、それぞれの工夫の良さを味わう授業。

1 単元名 わらい話を楽しもう 日本の言の葉

教材名 プレ教材 「白ねずみ」古典落語

メイン教材「恩返し」古典落語

ポスト教材「落語絵本シリーズ」(川端 誠 著 クレヨンハウス)

2 単元の目標

- 場面の移り変わりや登場人物の人柄が表れている言葉に着目しながら、話の展開の面白さや、人物の面白さを読むことができる。
- 話や登場人物の面白さが相手に伝わるように音読したり、相手の音読の工夫したことを落とさずに聞いたりすることができる。
- 相手に伝わる音読の仕方に関心を持ち、試行錯誤しながら工夫して音読しようとすることができる。

3 目指す子供を育てるために

単元で目指す子供の姿

学びに向かう構えをもたせることと、言葉の力を付けることを意識してきた。本単元においては、学びに向かう構えでは、①多様な考えを受け入れ、尊重する態度②たとえたとどしいものであっても、自分なりの表現を皆に話すことを臆さない態度③友達の学びに向かう姿勢から、自らの学ぶ姿勢を振り返る謙虚さの3点を目指す。また、言葉の力では、話や登場人物の面白さが相手に伝わるように音読したり、相手の音読のよさを落とさずに聞いたりすることができる子供の姿を目指す。

手立て

- ・他者を意識した音読
- ・学びを自覚し、見通しをもつ振り返り

単元について

- ・本単元は、「笑い」に関連した読書をしたり、音読を発表し合ったりする単元である。
- ・「白ねずみ」「恩返し」「落語絵本」は、江戸時代から伝わる日本の代表的な話芸である「落語」の演目である。庶民の飾り気のない生活ぶりや生き生きとした話し言葉を通して、登場人物の願いや感情に触れていくことができる。
- ・関連する本を探して読んでみようとする態度、落語を演じてみたいという思いをもつことを期待し、メイン教材、ポスト教材へとつなげていきたい。
- ・プレ教材で習得したことをメイン、ポスト教材で活用できるように単元構成を工夫する。このことにより、学びの自覚を促すことができると考える。

単元で育てたい資質・能力

- ・相手に伝わるように強弱や間の取り方等を工夫して音読すること。
- ・友達が工夫したことを落とさないように集中して聞くこと。
- ・自分と他者の考えを比べることで、自分の考えに自信をもったり、他者のよさを見付け自分の考えに取り入れたりし、自分の考えをよりよいものにしようとする。

主に働かせる見方・考え方
面白さを伝えるためには、音読の仕方を工夫するとよいことに気づき、様々な表現方法の良さについて考えること。

子供の実態

- ・「学び」を自分事としてとらえず、参加しようとする態度が育っていない子供がみられる。
- ・自分の考えを人前で話すことをためらい、分かっているけど自信がなく話したがらない傾向がある子供がいる半面、自分が言いたいときははじめから大声で話し出す子供もいる。
- ・聞く・話すの活動では、友達のよいところを見つけて感想を述べたり、共感的に聞くことが徐々にできるようになっているが、相手意識・目的意識をもつところまでは至っていない。
- ・叙述を根拠にした読み取りには至っていないため、思い付きの発言が多い。

4 授業の実際

(1) 本時の目標(1/5)

登場人物の行動や台詞について考えることを通して、作品の面白さを読み取り、強弱や間の取り方等を工夫しながら音読することができる。 【知識・技能】

(2) 授業の概要

1 「白ねずみ」を読み、気付いたことの発表

2 「落ち」について知る

3 学習課題の確認

T:「白ねずみ」を読みたいんだけど。

C:「白ねずみ」を暗記する。

T:「白ねずみ」を暗記して……。ゴールはどうしますか。

C:みんなであわせて読みたい。

C:一人で読みたい。

C:発表したい。

T:発表しようまでいくかな。

「白ねずみ」を暗記して音読をし、発表しよう。

T:今日の勉強の流れは。

C:一人読み。

C:暗記。

C:音読記号。

C:ライトペアシェア。

T:ライトペアシェアは任せますよ。一人で考えたい人はそれでもよいです。

C:発表する。

4 音読練習

5 「落ち」について知る

6 音読記号をつけての音読練習

T:どのように音読すればよいか考えましょう。

C:ワークシートに音読記号や理由を書き込む。

子供から出された音読練習の方法

※個人で、教師と一緒に、友達と一緒に等、練習の方法は子供に決定させる。

評価:面白さが伝わるように、工夫して音読をしている。

6 音読を発表し合う。

友達と自分の音読との比較

C:分かりやすい声でよかった。

C:大きな声でよかった。

() ば、落語はもっと () になる。

7 学びの自覚を図る。

C:落ちに音読記号を入れれば、落語はもっとおもしろくなる。

C:自分なりの工夫を入れれば、落語はもっと楽しくなる。

C:自信をもって楽しく音読すれば、落語はもっとうけるようになる。

5 子供の振り返りからの考察

国語科では、子供に「わかったこと・かかわり・これから」の観点で振り返りを行うようにしている。本単元全体の学習を振り返りでは、以下のような記述が見られた。

- ・今日は、初めて、会話がただの文章に音読記号を付けて読む勉強をしました。落語には何人もの登場人物が出てきますが、読み方を工夫すれば、それぞれの特徴を表現することができることがわかりました。また、落語には「落ち」というものがあることもわかりました。これからの学習に生かしたいです。
- ・いちばん表現したい部分に音読の工夫を入れることで、より内容が伝わりやすく、面白くなることがわかりました。ライトペアシェアをすることで、どんどん読み方が上手になったのがうれしかったです。前に声が小さいと思っていた〇〇さんが、とても大きな声ではっきりと朗読していて驚きました。
- ・ただ読んでいただけだと、面白くなかった最後の「落ち」の部分に、工夫を入れることによって、こんなに面白くなるんだと初めてわかりました。私は、間をとって小さく読むのがいいと思いましたが、〇〇さんはネズミになりきって、きょろきょろしながら大きな声で「チュュー」と言っていたのもいいなと思いました。音読を工夫し、ワークシートからはなれても、しっかり読めている人がいました。見習いたいです。
- ・自信をもって堂々と朗読すれば、落語はもっと生き生きとしたものになると感じました。同じ文章でも、表現する人によって、いろいろな変化が生まれると感じました。これからも、自分が読み取ったことをうまく表現できるように音読を工夫したいし、違う表現の仕方はないか、もっと学んでいきたいです。

以上の記述から、「わかったこと」として音読の仕方を工夫することで内容の伝わりやすさや面白さが変わることと「落ち」という話の展開、「かかわり」としてライトペアシェアなどを通して友だちの良さへの気づきや他者との関わりから学びを得たことの自覚、「これから」として話の構成・展開のひとつである「落ち」に着目した読みや音読を工夫していくことを見通していることがわかる。何を学んだのか（資質・能力）、どのようにして学んだのか（主体的・対話的な学び）、学んだことを今後どう活かしていきたいのか（深い学び）を子供たちなりに言語化しているのを見とることができた。

なお、振り返りについては全員が記述することができており、学びを自分事として捉えていることを見とることができた。

6 本実践の成果と課題

(1) 成果

- ・【単元を横断した学びの活用】「最後に落ちがある」という話の展開・構成について知ることは、後期に予定している「モチモチの木」での学習に活かされるものと考え、教科書教材ではない落語を意図的に単元として組み入れた。特に本時では、「落ち」に気づき、音読を工夫することをねらった。その結果、本単元以降、読むことの授業などにおいて子供たちが「落ち」があるかどうかを意識する姿が見られた。単元を横断して学びを活用していく力がついたことを成果としたい。
- ・【「主体的・対話的で深い学び」の成立】音読を工夫する際、対話を重ねながら、粘り強く試行錯誤している姿がみられたことから、「主体的・対話的な学び」が成立したと考える。またこれまでの学習で積み重ねたものを一つでも多く使って力を発揮しようとしていた姿から、「深い学び」についても達成できた部分があると考え。

(2) 課題

- ・「音読」について、工夫すること自体ができているかと、工夫したいことが実現できているかには差があることが多く、自己評価や相互評価を活かした指導のありかたには課題が残った。例えば、音読を発表する際に、「うれしいという気持ちが伝わるように、高い声で速く

読みます。聞いてください。」など、何をどのように工夫しているのかを話してから音読させることで、音読する側には工夫を明確化する力、音読を聞く側には音読の工夫を評価しながら聞く力をつけるようにしていきたい。
(高瀬 美千代)

【実践例② 授業者：田澤 真也子 対象：1 学年 3 組】

本時で目指す授業

子供がよりよい聞き方についての対話を通して、話す人の気持ちを考えて聞くことの大切さに気づき、前時と本時の学びを実際にインタビューする際に活用することができる授業。

1 単元名 一ねん三くみ ともだちしょうかいずかんをつくろう

教材名 「ともだちのこと、しらせよう」(光村図書 1 年下)

2 単元の目標

- 身近なことを表す語句の量を増やし、話や文章の中で使うとともに、言葉には意味による言葉のまとまりがあることに気づき、語彙を豊かにすることができる。
- 内容が詳しくなるように観点に沿って質問したり、話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように聞いたりすることで、話す人の気持ちを考えながらインタビューすることができる。
- 質問して分かったことを語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫することができる。
- インタビューを通して友達の楽しいことを紹介する活動に関心をもち、試行錯誤しながら他者と対話しようとする。

3 目指す子供を育てるために

単元で目指す子供の姿

- ・対話を通して、観点に沿って質問すると内容が詳しくなることや話し手の気持ちを考えて聞くことで大事なことを落とさずに聞くことができることに気づき、その気づきを生かしながら話をつなげてインタビューすることができる子供。
- ・質問の答えを基にまとまりを意識しながら文章を書いたり、書いた文章に対する感想を伝え合ったりすることができる子供。

手立て

- ・他者を意識した対話
- ・学びを自覚する振り返り

単元について

- ・友達の楽しいことについて取材し、分かったことを文章に書いて紹介するという「話すこと・聞くこと」と「書くこと」を関連させた複合単元である。
- ・「ともだちしょうかいずかんをつくろう」という言語活動を設定することで、友達の楽しいことについて詳しく取材し他の学級の人にも紹介するという相手意識と目的意識を明確にし、学習の見通しをもたせる。
- ・インタビュー活動は初めての経験であるため、実際のインタビュー映像を見せる。その際、2つの映像を比較させることで、よりよいインタビューについて捉えやすくする。
- ・インタビュー活動は、3人グループで行う。やり取りを客観的に聞く3人目がいることで、音声言語を介しても学びの活用が図られているか評価しやすい。
- ・紹介文を書く活動では、モデル文を提示し、まとまりを意識して書くことのよさに気付かせるようにする。また、紹介文を読み合う活動では、感想を交流し合うことで、自分の書いた文章に自信をもったり相手のよさに気付いたりすることができる。

主に働かせる見方・考え方の
話の内容が詳しくなるための
質問の仕方や聞き方が
分かること。

- ・一単位時間の前半で習得したことを後半で活用できるように単元構成を工夫する。このことにより、学びの自覚を促すことができる。

単元で育てたい資質・能力

- ・インタビューして分かったことや思ったことを表現するための適切な言葉を探し、紹介文の中で使う力。
- ・話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように、話す人の気持ちを考えながら集中して聞く力。
- ・相手の話に関心を持ち、質問したり相手の発言を受けたりして話をつなぐ力。
- ・聞き取ったことを内容のまとまりが分かるように工夫して文章に書き表す力。
- ・書いた文章を読み合い、互いの良さを見付けて感想を伝え合う力。

子供の実態

○「話すこと・聞くこと」

- ・自分の体験について簡単な文章で話すことができるが、思いつくままに話している。
- ・友達の考えと自分の考えを比べたり、よいところを意識したりしながら聞くことができるようになってきている。一方で、集中して聞いたり感想を述べたりなど共感的な態度で聞くことはまだ身に付いていない。
- ・友達の発表や考えを聞いて、分からないところや詳しく知りたいことなど質問する力はまだ身に付いていない。

○「書くこと」

- ・自分の体験とその時の気持ちを簡単な文章で短く書くことができるが、まだまとまりを意識して文章を書いた経験はない。

4 授業の実際

(1) 本時の目標（3／6）

2つのインタビュー映像の比較からよりよい聞き方について対話することで、話し手の気持ちを考えながら聞くことの大切さに気づき、話をつなげてインタビューをしようとすることができる。

【思考・判断・表現(1)エオ】

(2) 授業の概要

1 前時までの想起

2 学習課題の確認

T:今からビデオを見てもらいます。インタビュー名人の技が使えているかどうか考えながらみてください。

※インタビュー映像①（質問あり・反応なし）視聴

C:合ってる。

C:惜しかった。

T:もう一つビデオを見てもらいます。どちらが、インタビュー名人か後で聞くので、どちらが名人か比べながら見てください。

*インタビュー映像②（質問あり・うなずきや復唱、感想など話し手の気持ちを考えた反応あり）視聴

C:ええ。どっちかな。

T:1番がよかった人。（三分の一）

T:2番がよかった人。（三分の二）

T:どちらがより名人なのか、みんなで考えてみましょう。今日のめあては、何でしょう。

①と②では、どちらがインタビュー名人にちかづいているかかんがえよう。

3 課題解決のための対話

*インタビュー映像①②を文章化したワークシートを配付

T:自分がインタビュー名人だと思ったほうの番号に丸を付けます。そして、名人だとわかる文に印

をつけましょう。書ける人は理由も書いてみましょう。

よりよい聞き方についての対話

※詳細は「5 授業の考察」内の言語活動のプロトコル参照

評価：内容が詳しくなるように観点に沿って質問したり，相手の知らせたことや自分の聞きたいことを落とさないように話し手の気持ちを考えながら聞いたりすることで，話をつないでインタビューしようとしている。

4 学びの自覚

※詳細は「5 授業の考察」内の言語活動のプロトコル参照

※時間の都合上，当初予定してた「学びの活用」と「振り返り」を行うことができなかった。

5 次時の予告

T: 次の時間は，実際にインタビューに挑戦してみましょう。

C: やったあ。

5 授業の考察

(1) プロトコルからの考察

本時では，話し手の気持ちを考えながら聞くことの大切さに気付かせるために対話を行った。

以下は，全体対話におけるプロトコルである。

よりよい聞き方についての対話

◎1回目のインタビュー映像視聴後の全体対話

T: ①を選んだ人はどこがよかったですか。

C: 「どんな料理をするのですか。」の質問が良かったです。

C: 普通だと思うんだけど。

C: 下(②)にもあるよ。

T: ②のほうにもあるようですよ。みんなもあるかどうか見付けてみて。

C: あった。

C: 他にも上にあるのが下にあるよ。

T: ①番の人どうですか。上の質問は下にもあるんだって。①番は質問の技をきちんと使っていますね。

②番はどうですか。②番を見ていきましょう。

C: ②番にも全部入っています。

T: ②番のよいところはどこでしょう。

C: 「わあ，すごいですね」のところが①にはないのでいいと思いました。

T: どうしていいのかな。

C: 気持ちを言っている。

C: ②は①と違って言葉のキャッチボールをしている。

C: Mさんにちょっと似ていて，相手に合わせて言葉のキャッチボールをしている。

C: 「いろいろ教えてくれてありがとうございました」のところがうれしくなる感じ。

C: ちゃんと気持ちをいっぱい言えていていいと思います。

C: 「かぼちゃ丸ごとグラタンを作りたい」と，真也子先生（インタビューする側）が今度したいことを言っていていいと思いました。

C: 感想を言っていていいと思いました。

T: どうして感想を言うといいのかな。

C: そう言ってあげると相手がうれしくなるからです。

T: うれしくなるのは誰かな。

C: 神山先生（インタビューに答えていた側）

T: 感想を言ったり気持ちを言ったりすると，相手がうれしくなるんですね。

T: もう一度ビデオを見てみましょう。（＊目線にまだ気づいていなかったため）

◎2回目のインタビュー映像①を視聴後のつぶやき

C: 相手のほうを見ていない。

C: 下を見ている。

C: 感想を言っていないで，繰り返してる。

◎2回目のインタビュー映像②を視聴後の全体対話

C：手で○をだす。
 C：やっぱりパー（②）だと思ってきた。
 C：グー（①）だったんだけど、パーの人から考えをもらって変わりました。
 T：どうして変わったのかな。
 C：インタビューには感想はいらないと思っていたけれど、見てみたら、①は下を見ていて残念そうで暗い感じがしたけれど、②は前を向いていて感想も言っていて、神山先生もうれしい感じに見えました。
 T：目が合うとうれしいんですね。
 C：自分も②番に変えたくまりました。①は暗いけれど、②は明るい感じ。

学びの自覚を促すための対話

T：気持ちを言ったり感想を言ったりほめたり、目が合ったりすると、何がいいのかな。
 C：聞いている人も聞かれた人もいい気持ち。
 T：答える人も聞く人もいい気持ちということ、技に入れてもいいですか。誰の技になるかな。
 C：聞く人の技。

①を選んだ子供が、②を選んだ子供の「②は、相手に合わせて、言葉のキャッチボールをしている」という発言から、感想や気持ちを話すと相手がうれしくなることに気づき、自分の考えを変容させていく様子が見られた。

ここまでの対話の様子から、本時で気付かせたい「目線」にふれる子供がいなかったため、再度インタビュー映像を視聴した。2回視聴したことにより、「目線」にほとんどの子供が気付くことができた。この時点で①がよいと述べていた子供も②へと考えが変容した。その結果、子供たちからは、「目を合わせたり、感想を言ったり褒めたりすると、聞かれた人も聞く人もいい気持ちになる」というまとめが導き出された。

(2) 子供のノートからの考察

本時では振り返りを行うことができなかったが、単元終了時に「わかったこと・かかわり・これから」の観点で、単元全体の学習を振り返らせた際、以下のような記述が見られた。

- ・前の自分は、実は目を合わせて聞くことができていませんでした。でも、この勉強で、聞いている証拠になるし、みんながいい気持ちになるし、明るくなるし、やっぱり大切だなと思いました。
- ・質問の技と聞き方の技を使うと、相手がうれしくなってどんどん話してくれるし、心のキャッチボールができることがわかりました。ぼくは、インタビューのときにその技を使ってみたら、うまくいきました。
- ・感想を言うと、答える人も自分もいい気持ちになって、答える人もどんどん言いたくなるので、普段の生活やお勉強のときでも使ってみたいです。
- ・質問の技と聞き方の技と書き方の技を合体させたら、紹介文を詳しく書くことができました。他のクラスのお友達にも読んでもらいたいです。

以上の記述から、単元全体を通して、言葉の力の自覚として、質問の技（質問の言葉を使う、相手の楽しいことに合わせて言葉を選ぶ）・聞き方の技（感想・繰り返す・目を合わせる・うなずく）・書き方の技（まとまりで書く）と、その効果や意義について身に付けることができた。また、それを今後の学習や自らの生活に活かしたいという記述も見られたことから、単元を越える学びや言語生活の向上に資する学びを見とることができた。

6 本実践の成果と課題

(1) 成果

- ・【資質・能力の確実な獲得】単元構成を工夫したことで、内容面に個人差はあるものの、「インタビューしたことを基に紹介文を書く」という単元のゴールを全員が達成することができた。インタビュー名人の技として、①質問の技、②聞き方の技、③書き方の技というように、身に付けさせたい資質・能力を段階的に組み込み、子供が身に付けられるようにしたことで、どの子供も無理なく学習に取り組むことができた。
- ・【単元や教科を横断する学びの活用】単元を展開していく中で、インタビュー名人の技（①

質問の技②聞き方の技③書き方の技)が、他へ転移する姿が見られた。例えば朝の会で、係からの発表を聞く際には、「質問の技と聞き方の技を使って聞くぞ。」といった発言や「書き方の技は、絵日記でも使えるね。」などといった発言である。また、実際に感想を述べたりうなずきながら聞いたりする姿を見た他の子供が「名人!」と声かけをする姿も見られた。学びを本時・単元・教科に留めず、他教科や日常生活でも活用を図ろうとしていた。

- ・【教師の支援を介しての対話的な学び】本時の対話場面は、教師を介して子供の対話をつないでいくことで全体対話で進めた。考えを広げたり深めたりする過程では、新たな考えに出会わせることが重要である。なぜなら、他者の考えを聞くことで自分の考えが再考され、吟味・精査されるからである。本時では、2つのインタビューのどちらがいかとその理由という、整理された立場での対話であったが、友達の考えを聞いて自分の意見を再考したり変容させたりした子供も見られた。今後は自分たちで意見を広げたり深めたりするような対話ができるように支援したい。そのために、子供が友達と話したくなるような必然性のある課題設定の工夫や身に付けたい資質・能力を意識した対話の設定(タイミング・形態)などを考えていきたい。

(2)課題

- ・本時では、活用や振り返りの場面まで進むことができなかった。原因として、教師自作のインタビュー映像の内容が複雑だったことが挙げられる。質問の答えに対し感想や復唱などを述べるやり取りが何回か続くインタビュー映像だったため、情報量も多く、どこを比較してよいのか悩んでいた子供も見られた。本時の構成を学習者の様子に応じて柔軟に対応できるように予定することが課題であると考ええる。

7 協同研究者(弘前大学教育学部 鈴木愛理先生)より

- ・田澤学級では、子どもたちの国語学習に対する意識や意欲の高さを感じられる。人と違う意見でも素直に発表する姿やこれまでに学んだことを口走る姿にそれを見ることが出来る。
- ・インタビュー映像を見せた際、①を支持する学習者が一定数いたのは、授業の最初に既習事項として振り返った「質問の技」が達成されているかどうかという視点で映像を視聴した結果であると考えられる。その視点で見た場合、①も②もよいものに見えたことだろう。また、これまでに学んでいない「感想を述べること」などはインタビューにおいて余計なこと、なくても構わないことだと思ったのかもしれない。必要な情報を短時間で聞き出さなければならぬ場合であれば必要最低限の質問事項を手短かに聞くという方法も決して間違いとは言えない。子どもたちが②のよさに初めから気づくように本時のめあてや導入を工夫するとすれば、「より気持ちよくインタビューを受けてもらえる工夫を考えよう」など、本時で考えたいことをより具体的に共有しておくことも一案であろう。
- ・教師の見通しとしては①を支持する学習者はもっと少ないはずであったそうだが、①をよいとした子供が3分の1いたことで、②がよいと思った3分の2の子供とその理由について聞き合う対話が自然と活発になることにつながったので、結果的にはよかったのではないかと考える。平成29年告示の学習指導要領では、「主体的に学習に取り組む姿勢」として粘り強く学習を調整することを求めている。今後は、学習者が試行錯誤する時間的余裕も授業に組み込んで考えていかなければならないのかもしれない。
- ・本時で学んだことは、よりよい聞き手として普段から何気なくしていることでありながら自覚されることが少ないことでもあっただろう。例えば、教師は授業で子供の発言に頷いたり、コメントや感想を付け加えたりすることで子供の発言を促しているが、それを板書に残したりはしない。子供は発言を促す聞き手の工夫に日々ふれているものの、それを工夫として自覚するためには学習する機会をもつことが必要であることが改めてわかった。同様のことは国語科の他の学びにも言え、普段していることでも力として意識されていないために必要なときに発揮できないことがある。言語生活と教室とを往還する学びを促すためにも、言語生活の振り返りから言語行為における課題や意義をみつけることを授業に取り入れていければ理想的である。
- ・「比べて考える」という学習方法に関する知識は、単元や教科を超えて活用できるものとして意義があったと考える。ただ、1年生という発達段階を考えた場合、「比べて考える」ためにはどうしたらいいのか、段階を踏んで教える必要があったのかもしれない。例えば、①と②で違うところに線を引き、①と②の異なりを全体で共有してから、どちらがよいのか、ま

たその理由について個人で考えさせることで、「比べて考える」とはどういうことなのかを学ぶこともできるのではないかと考える。

Ⅲ これまでの実践から明らかになったこと

1 成果

成果は2点ある。1点目は段階に応じた対話を設定したことにより、考えを深めたり広げたりする子供の姿が見られたことである。実践例①では、子供自らが対話の形態を決め主体的に対話活動に臨んでいた。試行錯誤しながら何度も対話を重ねた結果、他者の考えの良さに気付く新たな学びを得ることができた。実践例②では、全体対話において、教師が子供の対話をつないでいく形で進めたところ、子供は他者の考えと自分の考えとを比べながら聞くことができた。その結果、自分の意見に自信をもったり変容させたりすることにつながった。2点目は、単元や教科を横断した学びの活用が図られたことである。実践例①②とも、獲得した学びを単元に留めることなく、次単元、他教科、日常生活において活用する姿が見られた。本教科部が目指す「言葉の力を自覚し、自らの言語生活に活かす子供」に近付くことができた。

2 課題

課題は、学びの自覚が十分ではなかった子供もいたことである。「わかったこと・かかわり・これから」の3観点について、定期的に振り返りを行うことで学びの自覚を図ってきた。しかし、対話から得られた新たな気づきを基に自分の考えを再考することや習得した知識を言語化することに難しさを感じている子供の姿も見られた。これは、振り返りの目的や意義が明確でなかったことや振り返るタイミングが適切ではなかったこと、習得した知識の活用の仕方等が原因としてあげられる。単元計画を工夫する等、教師だけではなく子供自身も振り返りを行う目的を明確にできるような手立てを講じ、学びの自覚を図ることにつなげていきたい。

(田澤 真也子)